

“あいまいさ”をいかに扱うか

札幌営林局 小 宮 忠 義

先日、「サイバネティクスと社会」という国際会議が開かれた。

「サイバネティクス」とは、「機械と動物における通信と制御の学問」と説明されている。近年この学問もかなり研究が進んで、国際関係とサイバネティクスということで日本のM氏が講演し、その中で、「国際関係をコンピュータでモデル化する場合でも、技術と価値観の接点が一番問題となる。」
「社会システムの理解には、いわゆる自然科学から生まれた数学だけでなく、人間社会の“あいまいさ”をそのまま扱える新しい数学の開発が必要だ。」と述べていたそうである。

☆

☆

林業経営は、林木生産の長期性と、生産立地の多様性から多くの“あいまいさ”を含みながら行われている。

林業の研究は、部分部分、過程過程のそれぞれで“あいまいさ”をなんとか解明しようとやってきたという言い方もできるのではないだろうか。

そして林業経営では、仕事を行っていく上でその解明しきれのを待つてはいられないので、何らかの指針、基準を必要とし、仕事のやり方をモデル化した。

☆

☆

この例として地位指数の判定とか、密度管理図などの形がある。

前者は、地位（基準林令における主林木の平均樹高）に影響する自然条件の諸因子を測定して、その数値を入れて算出すれば、造林しようとするところの樹種毎の地位が指数となって表わせるので、育林上の判断に使える。後者は、地位ごとに造林した林分の成立本数の変化に応じて主林木の平均樹高、胸高直径がどういう関係になるかを示しているので、育林から収穫に至るまでの経営設計に使える。

この外に、シミュレーションを使った種々の研究がなされている。これらに共通して言えるのは、用いている条件数値や法則性に“あいまいさ”を含んでいることであろう。しかし、使う方がこの“あいまいさ”を心得て使えば、それなりに指針として使える。

☆

☆

個々の“あいまいさ”を究明していくのが研究者の宿命だろうが、このあいまいさのいくつかは、現場での訓練でカンを養い、実際にはそれほど不便は感じない仕事のやり方ができることを思う時、なおさらこの“あいまいさ”の奥深くを究明していく困難に立ち向うことは、労多くして……と考えってしまう。

一つの考えとして、許容限界のような形で個々の“あいまいさ”に答えがでていると、その限界の近辺だけ気を付けてセーフティファーストの仕事のやり方の選択ができるので、まずは役に立つと思うが、そのような検討方向は如何だろうか。